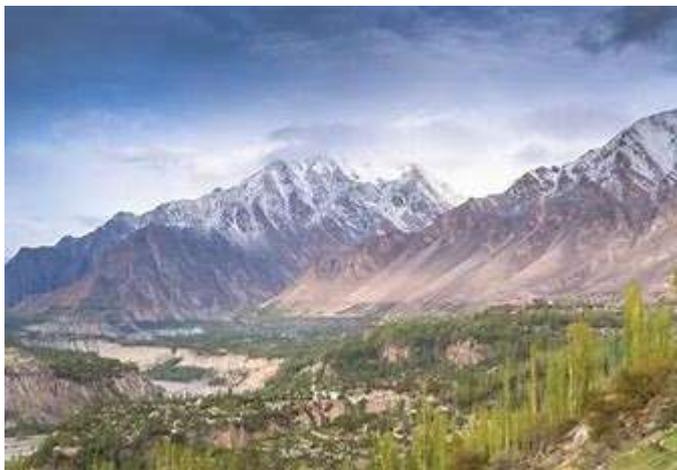


西川一三「秘境西域八年の潜行」を描いた沢木耕太郎「天路の旅人」 (その3)

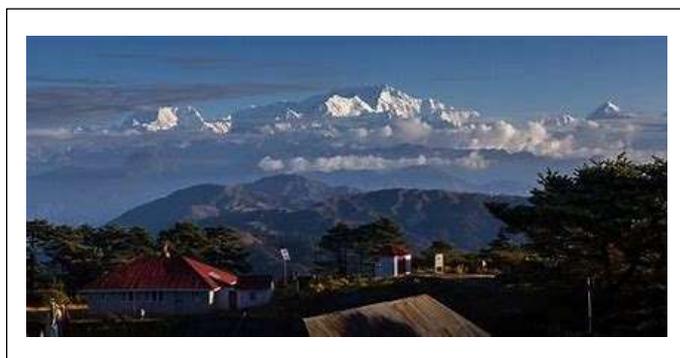
八柳 修之

インドへ そして再びチベット

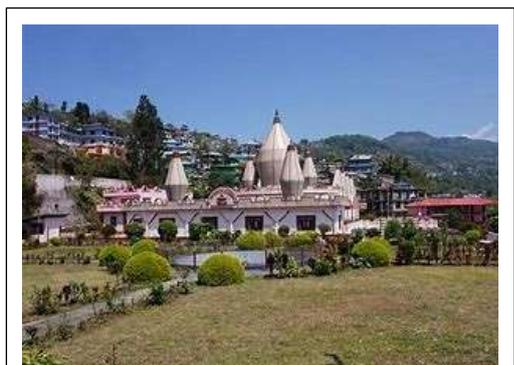
12月、西川はシガツェを出発した。バルタンと托鉢しながらのインドへの旅は、新しい旅の在り方は自分を鍛えてくれるように思えた。標高4500mのパリの街でチベット貨をインド貨に換えた。パリからインド側のカリンボンまで、「早くて5日、ゆっくりなら7日」の行程だった。途中、ヒマラヤを越える。一旦、標高1500mのヤートン(亜東)まで下り、そこから一気に6700mのザリラー峠まで登るのである。パリには3日ほど滞在。カリンボンへの道は溪谷を下る。奇岩、溪流、流れ滝がある風景は蒙古人のバルタンには驚きであった。



ナンガバルバット



カンチェンジェンガ



カリンボン



カルカッタ シアルダール駅

ザリラー峠を越え反対側を下って行くと、カンチェンジェンガ峰、ナンガバルバット峰を目にした。下るにしたがって暑くなって行った。カリンボンは海拔2000m、インドの最初の都市であった。金持ちの蒙古人が住んでいると聞いて捜し、欧風の建物になんと木村肥佐夫がいた。そして日本が敗戦したことを聞いた。

木村はここで新聞社の下働きをしていた。西川は日本の敗戦について詳しく知りたい、そのためカルカッタまで行こうという意思は変わらなかった。木綿のチベット服を買いカルカッタへ向かった。徒歩、乗用車と列車を乗り継ぎカルカッタの東玄関駅シアルダールに着いた。宿泊はダルマサール(無料宿泊所)、日本に関する情報を求めて西川は街をさまよい公園であった紳士から英語で負戦を知り、改めて木村の情報を確認した。

もはや日本という国家の庇護は受けられない。インドの官憲に逮捕されれば不法入国者として罰せられる。密偵の西川一三は死んだが、蒙古人ラマ僧のロブサンポーは生きている。チベットのカリンボンに戻ろう。6日後、二人はカリンボンに汽車で戻った。西川の所持金は80ルピーになっていた。

日本は敗戦し自分の使命は無くなった。いまはただ生きていくことだけを考えればいいようになった。



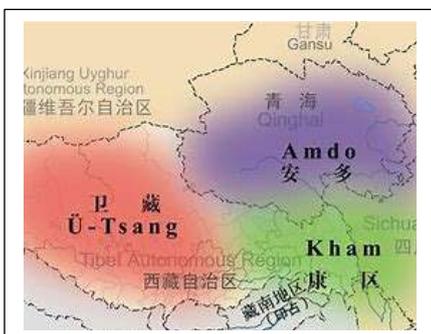
モラテ峠

考えた末、80ルピーを元手に煙草売りの行商をすることにした。ヒマラヤの**テモラ峠**を越えチベットのパリ間、ヒマラヤ越えた。7度目の峠越えのとき猛吹雪の中歩いたため足が凍傷になってしまった。所持金は120ルピー（2、3ヶ月の生活費）になってしまい傷が癒えるのを待つしかなく最後の手段として物乞いの群れに身を投じるしかなかった。ガリンポンには無料宿泊所があった。物乞いたちは歩くことが出来ない西川に親切に食べ物を恵んでくれた。キリスト教の伝道所で無料の診療を受けられると聞いて塗薬をもらい、次第に良くなっていった。

1946年（昭和21年）春、西川はインドのガリンポンから再びラサに向かって出発した。同行したのは禁製の煙草を密輸する2人のタングートのラマ僧、21日間の旅だった。ラサでは躊躇もあったが、食と住が確保できるデブン寺で修行することにした。2カ月間で殆ど出来なかったチベット語をマスターしどんな経典で読めるようになった西川はすごい奴という評判になり、修業は厳しいものの満足した生活を送っていた。

1948年1月、木村から至急会いたいという手紙があり会った。英国諜報部から東チベットの中国側の状況を探る仕事を依頼され引受け、同行しないかという話であった。英国はインドと中国との間のチベットに独立を保ってもらいたいという意図があり、中国共産党がチベット侵略を実行すれば東チベット（カム、西康）からと見ていた。木村を日本の密偵として知っていたことであった。カムの中心都市はチャムド（晶都）、英国の要望はその先、州都の打箭炉までであった。打箭炉までは世界最大の褶曲山脈地帯である。世話になった高僧への恩義、信頼を裏切るものであったが、悩んだ末、同行する旨、1月末、木村に伝えた。

ラサから打箭炉までは往復約3600kmであるが、打箭炉のはるか手前の玉樹に行くだけで、かつて経験したことがない7ヵ月という長さの旅になってしまった。それは西川と木村の性格と体力の差に起因するものであった。直情型の木村は各地でトラブルを起こした。また、木村はこれまで自分の足で歩くことが少なかったため普通の旅人が2日で歩くところを5日もかかった。ともあれ二人は東チベットにおける最大の都市、チャムドに向かって歩いた。次々と立ち上がる屏風を連ねたかのような褶曲山脈の山塊を越えるため4500m級の峠をいくつか登り下りする厳しいものであった。とりわけ「西の雪山」の名があるヌブカン峠越え、「東の雪山」と呼ばれるシャルカン峠は道が凍り付いて生死は紙一重だった。ラサを出て1ヶ月を過ぎるころから雨の季節となった。隊商の後を追ってイチューラ峠（四つの峠）を越えた。最後の峠の**ナムツオラ**（天の峠）は四方八方、見渡す限り白雪の山脈が何重に重なっていた。ラサを出てから2ヵ月、およそ1200km、カムの都ともいべき**チムチャド**に着いた。



カム 位置

チムチャド (晶都)

ナムツオラ峠 (天の峠)

このチムチャドから打箭炉まで向かう筈だったが、木村は体力のなさからラサに引き返そうと言い出した。西川は約束した仕事を放棄するのは日本人として恥ずかしくないかと言い合いになったが、せめて玉樹 (中国領、青海省の街) まで行こうということになった。ザチュ河を北上する旅はこれまでの旅とは比較にならないほど過酷な旅であり、木村はあちこちでトラブルを起こし足止め、ともかくカーラ峠を越え玉樹に着いた。二人は一週間足らずで調査を打ち切りラサへ戻ることにした。



玉樹市

玉樹からラサへは、すでに歩いたサルタン公路のナクチュを經由するルートは 20 日ほどかかるが、ナクチュからラサまではすでに 2 人とも来るときに歩いているのでこのルートを通ることにした。6 月初旬、玉樹を出発。それから野宿の旅、匪賊、追剥の集落、鍋を盗まれたことは痛かった。かっばらいにもあった。飢えた二人の話は食べ物の話ばかりと喧嘩、食糧が尽き果てた二人は生きる

ために最低限必要なもの、着ている服、二つの碗、一つの杓子、土鍋、杖ともなり武器ともなる槍だけになってしまった。そしてポタラ宮殿の黄金の屋根が見えたとき、2 人は 7 カ月の間、病気一つせず、なんとか無事にラサに戻ることができた。9 度目のチベットとインドの国境越えが西川にとって最後のヒマラヤ越となった。



現在、西寧市タール寺からラサまで青海鉄道があり、日本からにツアーもありましたが、現在、ツアー休止されています。